

〈研究論文〉

若者のキャリアを承認する「自立」観の検討

— 親子の認識に着目して —

小山田 建 太

若者のキャリアを承認する「自立」観の検討

—— 親子の認識に着目して ——

小山田 建 太

1. 問題の所在と研究の目的

1.1. 「家族戦略」としての若者の「自立」

これまでの日本社会では、仕事・家族・教育という3つの社会領域が堅牢な結び付きを保つ「戦後日本型循環モデル」が成立してきたために、若者の「学校から社会へ」の安定的な移行が広く実現してきたが、昨今この「戦後日本型循環モデル」は崩壊の一途をたどっている（本田 2014）。またこのような揺れ動きが社会全体の個人化や流動化を促進するために、若者の移行過程も複雑化しており、あらゆる個人にとって「自分固有の人生（a life of one's own）」を営む必要性が高まりつつある（乾 2010）。

そしてこのような社会変動の影響の下で、今日の若者が従来の「自立」のメルクマールを獲得することはより一層困難なものとなっている。このことは具体的な社会事象として、学校と企業とのジョブマッチングを成立させる「実績関係」の縮減（粒来 1997, 石田 2014）や、新卒一括採用・終身雇用・年功序列を特徴とした「日本型雇用システム」の解体（濱口 2013）、さらにはマクロ経済成長の低下と共同体的結婚システムの弱体化による若年層の未婚化（加藤 2011）などの趨勢にも表現される。すなわち、これまでの社会において一般に想定されてきた「学校卒業、初就職、経済的自立、離家、結婚、親になること」といった「自立」を象徴するライフイベントの実現可能性が縮減していくなかで、成人期への移行の試行錯誤を繰り返す「ポスト青年期」なるライフステージが拡大して

いつている（宮本 2005）。

したがってこれまでの社会政策は、教育や雇用から排除され実存的な不安を抱える若者を社会的包摂の対象と据え、彼らの「自立」を支えていくことを広く目指してきた（樋口 2004）。言い換えればこれらの社会政策は、若者の「学卒、就職、離家、独立世帯形成、結婚・家族形成などのステップを支える社会経済環境を整備すること」（宮本 2012, p.45）を目的とし、特に彼らの就労達成に期待する支援施策を広く展開してきた（児美川 2010）。そしてこれらの支援施策は、移行の危機に陥る若者の「自立」の支援に大きな意義を果たしてきたといえる。

ただ一方でこれらの政策や社会認識は、「自立」のメルクマールの獲得を通じた移行の実現を自明視することにより、その他の多様な移行パターンの存在を等閑視してきた可能性がある。この点に関して益田（2012）は、今日の社会が「構造として不安定な雇用を一定数必要としつつも、規範面ではそれを引き受ける主体を許容しない／しえない」ために、その非正規雇用労働者に対しては「労働による自立を果たして一人前」という規範的価値観（労働倫理）が生む軋轢を主体レベルで解消するよう要求しているのだと言及する。また山口・伊藤（2017）によれば、フリーターという生き方は正規雇用のみならず非正規雇用を経験する現代の若者にとっても首肯されがたいものとなっている。これらの研究が示すように、一般に想定される「一人前」の「自立」が未達成である状況とは、若者の主観性に否定的な見解を与えうるものであり、ひいては彼らのライフコースにおけるリスクとしても認識されうるものとなっている。

重ねてこのような不安定な移行期を過ごす日本の若者のリスクとは、その家族にも背負われる実態が見出せる。これまでの日本社会においては、若者の「成人期への移行のセーフティ・ネットは制度的にも社会慣習的にも親（家族）に期待されているという状況が」（宮本 2018, p.63）が存続してきたために、今日にかけても親が子どもの「教育」に関与することが広く求められている（広田 1999, 神原・高田編 2000, 天童編 2016）。

そして併せて重要なのは、上述される親の「教育」への関与とは、既存の社会構造の解体に伴う「リスク化」が進行する下でより一層強化されるものになっているということである。かつての社会状況と比較すれば、現代の若者の移行パターンはより「個人化・多様化・流動化」（宮本 2012, p.33）しているが、喜多は、個人の主体的選択や自己責任が強調されるにしたがって子どもの「進路選択や就職に際してかつて以上に親たちの関与と責任を求める」という「家庭責任の増大」が生じるようになっていることを明らかにしている（喜多 2011, p.167）。また武川は、進行する個人化への対応を徹底してこなかった公共政策の結果により家族が、「グローバル化と個人化の緩衝地帯としての役割を果たすこととなり、「移行の長期化」に伴う「育児の長期化」という「家族戦略」が、「経済的・象徴的な利得を短期的に高めるものとして」機能していることを指摘する（武川 2013, pp.47-48）。これらの知見を踏まえれば、昨今の若者の移行や「自立」の過程には、リスク化する社会構造や若者自身のキャリア選択のみならず、親の「育児」や「家族戦略」までもが不可分なものになっているといえる。実際にも、子どもの学業達成に対して親の「子育て」や「家族戦略」が与える影響は大きい（本田 2008, 松岡 2019）。

1.2. 従来型の「自立」観が内包する課題と、その克服

しかしながら以上の先行研究の知見を概観すれば、今日の若者が「自立」することに関して、

大きく2点の課題を指摘することができる。第1に、従来型の「自立」の実現を求める社会の在り方は、今日の「自立」の当事者となる若者や家族の現在性を肯定するものとなっていないのではないだろうか。事実、昨今の社会構造の転換は個々人の多様なキャリアの成立を促しており、従来型の「自立」の実現可能性も大きく減少しつつある。したがって従来型の「自立」とそのための「家族戦略」の責任を追及する社会の在り方は、一定数の当事者の不安や葛藤を増幅させるものとなり、ひいては彼らの現在性を大きく否定するものとなる。従来までの象徴的なメルクマールの獲得を通じた「自立」を殊に期待する社会認識の有効性や合理性は、親をも含む当事者の社会的文脈や主観的認識を詳らかにすることを通じて、再考される余地があるだろう。

第2に、昨今の日本社会における若者のキャリアの多様化を踏まえれば、従来型の「自立」を称揚するに留まらない、若者の多様なキャリアを承認・肯定する「自立」観を前提にすることの重要性が高まっているのではないだろうか。今日、このような「自立」観が広く共有されているとはいえず、彼らの社会的包摂を志向する政策および研究の過程においても「行動や資質の変化によって同調を獲得すべき逸脱者（必要な能力が欠如している人）としての個人へのラベリング」（山口 2020, p.109）が生じることとなっている。このことは、経済的次元のみならず承認の問題にかかわる文化的次元から当事者の名誉を大きく毀損するものとなるために、当事者にとって参照価値のある「自立」観を措定することが望まれる。

なおギデンズ（1991=2005）が論じるように、後期近代における社会構造の流動化とは各人に「ライフ・ポリティクス」を迫ると同時に「解放のポリティクス」をももたらすものとなっているが、既存の社会構造の下での当事者の主観的認識を捉える作業が、今日の若者の尊厳を毀損しない「自立」観の導出に大きく貢献するものと考えられる。

以上より本研究では、今日の若者の自立の当

事者となる複数の親と子（若者自身）を分析の対象として取り上げ、彼らに示される「自立」観をインタビュー調査データによって明らかにする。また本稿ではこれらの「自立」観のうち、若者の多様なキャリアに肯定的な解釈を与える「自立」観がどのように示されるのかについて特に着目したい。そしてこれらの調査結果を踏まえ、当事者の多様な現在性を承認し、また若者自身の主体的なキャリア形成に資する「自立」観の様相を提示したい。

そこで以下では、本稿が用いるインタビュー調査データの概要に触れ（第2節）、それぞれの親子における子ども（若者自身）の「自立」や親の「家族戦略」の実態などを同データから明らかにしていく（第3・4節）。そしてこれらの調査結果を踏まえ、当事者の不安や葛藤を煽る従来型の「自立」観の瑕疵やその再考の必要を指摘し（第5節第1項）、今日の若者の多様なキャリアの承認を可能とする「自立」観について考察する（第5節第2項）。

2. データ

前節より本稿では、東京大学社会科学研究所が実施しているパネル調査である「高校卒業後の生活と意識に関する調査」（以下、「高卒パネル調査」）の一環としてなされた親子を対象としたインタビュー調査データを使用する。この「高卒パネル調査」では、2003年度時点で全国の全日制高校3年生であった若者を対象として質問紙調査を毎年実施しているが、並行して彼らの生活実態を把握するインタビュー調査も継

続的におこなっており、特に2013・2014・2017年には本人のみならず彼らの親をも対象として、この間12組（24名）の親子への調査を実施できたことに大きな特長がある。これらのインタビュー調査は親と子のそれぞれに実施し、各インタビュアーを高卒パネル調査企画委員会のメンバー2～3名がそれぞれ担当した。所要時間は、各人につき90分程度であった。

また同インタビュー調査での主な質問項目として、まず若者に対しては現在の就業状態や婚姻・パートナー関係、現在の生活の満足度や悩み、現在や今後の生活で大切にしたいものなどの項目を扱った。次に親に対しては、これまでの子育ての考え方とその振り返り、子育てが「終わった（一段落した）」と感じるかどうか、現在や将来の子ども就業状態や婚姻・パートナー関係などに対する考えや希望などの項目を扱った。重ねて親子関係については親子ともに、現在の同居・別居の別や、援助のやり取りの状況、これまでの子ども（「高卒パネル調査」対象者）の人生の節目（高校卒業後や就職活動時など）における親とのかわり合い、そして今後の親子関係についての考えなどの項目を扱った。

そして同インタビュー調査においては、「学卒、就職、離家、独立世帯形成、結婚・家族形成など」（宮本 2012, p.45）といった従来型の「自立」のメルクマールを獲得する状況に「自立」を認識する子ども（若者自身）の語りや、子育ての終わりをそのような子ども（若者自身）の「自立」した姿に見出す親の語りなどが数多く確認された。しかしながら一方で3組

表1 インタビュー調査当時の「高卒パネル調査」対象者の状況（それぞれ仮名）

	親子（3組）	「高卒パネル調査」対象者の状況			実施日
		学校歴	学校卒業後の職歴	年齢	
①	斉藤亮介さん	大学(中退)→ 職業訓練学校(卒業)	正社員(警備員:3年)→ 正社員(介護士:2年目)	28歳	2013年12月
	斉藤博子さん(母親)				2013年12月
②	水野隆史さん	公務員試験対策の予備校→ 専門学校(卒業)	正社員(看護師:1年半)→ 正社員(看護師:2年目)	29歳	2014年12月
	水野昌行さん(父親)				2014年12月
③	小林和弘さん	専門学校(中退)→ 専門学校(在学中)		32歳	2017年8月
	小林圭子さん(母親)				2017年8月

の親子からは、そのような「自立」に対しての不安や葛藤がともに語られることとなっていた。ただこのうち小林さん親子に関しては、一度抱いたそのような不安や葛藤を払しょくし、また不安定な状況に対しても否定的な見解を加えない別様の「自立」観を表現していた。そこで以下では本研究の目的に準じて、これら3組の親子のインタビュー調査データに着目し、彼らの「自立」観や社会的文脈の具体をそれぞれ詳らかにしたい。

インタビュー調査当時の「高卒パネル調査」対象者の詳細は、表1の通りである。3名の対象者には未婚の男性であることや、親と同居していることに共通点があるが、学校歴や職歴には多様な移行過程が描かれている。

以下、第3節では齊藤さんと水野さん、第4節では小林さんの親子の語りをそれぞれ参照していく。なお各インタビューデータを提示する際は、抜粋箇所の第1発話者をR1、第2発話者をR2として表記する。なお筆者は、小林和弘さんのR1についてのみインタビュアーを務めた。

3. 「自立」をめぐる不安や葛藤——2組の親子の語り

本節では、齊藤さんと水野さんの2組の親子の語りから、両者の親子が抱える不安や葛藤を把握する。

3.1. 齊藤さん親子の語り

齊藤博子さん（齊藤亮介さんの母親）は、「子育て」について「一応は責任は終わったかなって感じはして」と語るも、現在（調査当時）の亮介さんの生活リズムが乱れている様子に大きな心配を抱えている。

R1：実際に成長された息子さんを見てどうですか。

齊藤（母）：なかなか難しい。やっぱり。例えば親と一緒にいれば、朝も起こしてもらうとかご飯も作ってもらうから、もう生活すべてに対してほんとは自立してほしかっただけ

ども、なかなかそこまではいなくて。まだまだそういうのは子どもだなみたいな。私たちも子ども扱いしてるのかなとは思うんですけども。

R1：自立って言うと色んな面であると思うんですけど、就職もされてるのもう1人で暮らしてほしいとか、そういったお考えもあったりしますか？

齊藤（母）：もし何の心配もないならそうしたらいいんじゃないかなとは思ってますけども、やっぱり1人になったときに、食生活とか日常生活、例えば夜遅くまで起きてて、今度反対に夜と昼が逆になるんじゃないかなとか、そんなことを考えるとまだちょっと無理だなみたいな。いつになればできるのか分からないんですけど、本人も多分あんまりそんなふうには思っていないかなとは思うんですけども。やっぱり人間の生活するなかで大事なリズムとかそういうもの、今の人たちってあんまり重要視してないけども、そういうのってやっぱり必要になって思ってるんで。

R2：なかなかお聞きしていると勤務時間がちょっと不規則な面もあるので。

齊藤（母）：わざとそういうの選ぶんです。「ほんとは夜勤ばっかの仕事が良かったんだけどなかった」とかって言って。

博子さんは、亮介さんの「食生活や日常生活」が乱れてしまっていることから彼の毎日の生活をサポートしており、亮介さんの「生活すべてに対」する「自立」は「なかなかそこまではいかな」と述べている。ゆえに彼が「1人になったときに」も、「人間の生活するなかで大事なリズム」を整えていく必要があると考えている。なおこのような認識のもとで、本来なら亮介さんにしたくない口出しもすることがあるといい、「それも一応子育てだと思ってる」と語る。

ただ、亮介さんの生活リズムの乱れには彼の就労状況の影響も深く関連している。亮介さんは、前職の警備員の仕事で「夕方から朝9時まで」のシフトをこなし、また現職の介護士の仕事でも主に「昼過ぎから深夜0時まで」と「(深

夜)0時から朝まで」のシフトに従事しているというが、このような就労状況に左右される彼の生活リズムが、親の思う「自立」とは乖離するものとなっていることが把握される。ただ博子さんも、このような就労状況から被る制約を同時に理解しており、亮介さんの生活リズムの改善を期待しながらも、そのような仕事に就く亮介さんの姿にジレンマを覚えている様子がうかがえる。

一方で亮介さんは、高校卒業後に大学へと進学したものの、専攻の内容が「うまくマッチングしなかった」ことなどの理由から3年半で退学をし、また同時期には統合失調症の診断を受けたことを語る。ただ比較的軽かった症状は服薬で改善していき、現在は1度の転職を経て正社員の介護士として働いている。なお学生時代を含めた自身の生活においては、様々な面で家族からの支えを受けてきたと実感している。

そして亮介さんは、近い将来の見通しや中期的な目標は「あんまりない」と述べており、一人暮らしや結婚などの予定や希望もないという¹⁾。ゆえに亮介さんは10年後の生活も、「その日を毎日暮らしてこんな(現状の)ような感じなんだろう」と語る。しかしながら遠い将来への「漠然とした」不安については、以下のように吐露している。

R1：先ほどからあまり悩みは今ないっていうふうにおっしゃってますけど、遠い将来についての不安というのも特にないですか。

斉藤：漠然としたものしかないですね。

R1：漠然としたものは何か、どんなものですか。

斉藤：何て言うのかな。年取ったときに金があるのかなあ。何とかできる金があるのかなあっていうのと、その金があっても、自分の意志が保てなくなったとき、今働いてるようなことになったときに、意というか、自分の意に沿ったようなことになれるか(＝をできるか)どうか。僕自身が、現状の職場のところで入居したくないよみたいな面も多少あるんで、僕はなるべくそれはなくなるように働いてはいますけども、全ての人がそういうふうな考えにはなかなか至るって、僕も1年

の新参ですし、そこまでどうせ、こうせって言えるあれではないんですけども。僕は、僕個人としてはそういうふうにならないようにはしてるんですけども、そういうふうな輪っていうか、考え方が広まればなあ、いずれ自分も世話になるっていう考えが広まればいいなあ。逆に言うと、そうじゃない限りは、今のまんまでいくら金持っても、そういうところに入れられたらおしまい。おしまいと言っちゃ言いすぎですけども、ちょっと不安だな、そういう意味で不安だになっていうのがありますね。それまでその金が残るかどうかっていうのもあるんですけどね、多少は。ほんとにその先の先ですね。終わりの話ですよ。終わりごろの話ですよ。

R2：そうですね。今の話はね。

斉藤：中期的にはあるのかな。中期的には何かあるのかな。あんまりないですね。考えてないですね。

亮介さんは、将来の生活において「何とかできる金があるのか」どうかを不安視しつつ、「自分の意志が保てなくなったとき」に「自分の意に沿ったような」生活がなしえなくなることへの懸念を表現しており、またそれは介護施設で働く自身の経験からも想起されるものとなっている。言い換えればこれらの語りにおいて、将来的な生活が毎日「こんなような感じ」ではありえなくなることへの漠然とした不安が示されていると捉えられる。しかしながら亮介さんは、このような不安を抱えつつも、比較的近い将来の見通しは持てないでいるという。

3.2. 水野さん親子の語り

上述のような「自立」への不安は、水野さん親子の語りにも見出される。水野昌行さん(水野隆史さんの父親)は「子育て」に関して、隆史さんから毎月「給料の半分ぐらい」を受け取りながら彼のガソリン代と交遊費以外すべての生活費を管理している現状に触れつつも、隆史さんが働いて「親からお金が出ないつうのは(子育ては)終わったようなもん」だと語っている。

水野（父）：俺は、ある程度、自分で働いてやっ
てるっつたら、ちょっとおかしいんだけど
も、管理はこっちでやってんだけども、やっ
ば親からお金が出ないっつうのは（子育て
は）終わったようなもんでねえの。

R1：それは、いつの時点で、そういうふうにお感じに？

水野（父）：ほとんど就職が決まって、ある程度給料、他からいただいてくるっつたあたりからは。

また昌行さんが子育ては「一段落したのかな」と認識するのには、隆史さんが看護師資格という「食いつぶれない免許も持ってる」ことの安心も大きくかかわっている。

しかしながら昌行さんは、「親がいなくなってもある程度自分でできるように」なることをその子育ての目標としてきたために、その点から現在の隆史さんはまだ「自立できてねえ」と捉えている。

水野（父）：とにかく最終的に親より後に生きて
るもんだから、その親がいなくなったとき
に俺どうすっべやって思うような子育てだけ
は、ずっとしたくないなと思ってたから。自
立できるっつたら今、自立できてねえん
けども、親がいなくなってもある程度自分で
できるようにっつうのだけはね。

また、隆史さんがいつまでも「親掛かり」でいるよりは結婚「してもらった方が親も安心だ」と考えており、その決断は「本人次第だ」と語る。しかしながら一方で、隆史さんの結婚の実現が遠のいている理由として、親子の居住するA地区には「就労する場所」が「限られた人たち」にしか残されていないことや、隆史さんと同年代の若者が「全部、外に出てしまっ」たことが指摘されている。

水野（父）：いや、それ（結婚）は早くできる
んであれば、してもらった方が親も安心だ
からさ。何もかにも親掛かりより、結婚すれば
2人してやる部分もかなり出てくっと思うん
ですね。そうは思うんだけど、なかなかね。
これだけは本人次第だから。

R2：そりゃそうですね。周りが言っても。言

うとまた。

水野（父）：昔みたく、そして仲人さんとか何とかがいて一生懸命になってやるっつうような時代でないし。して、この年代の子ども
たちが少ないのね、基本的に。

R2：この地域ですか。

水野（父）：全部、外に出てしまって。【A地区】
に残って仕事してるっつうのは本当に限られ
た人たちなんです。何せ就労する場所がない
から。

加えて昌行さんは、A地区の「付き合い」や「出会いの場」が消失してしまっている現状にも憂いを抱いており、現在の隆史さんが「自分から飛び込んでって」新しい人間関係を増やすこともできていないと述べている。

水野（父）：要するに我々の年代だとさ、上でも
下でもある程度（付き合いがあった）。（し
かし隆史さんの世代は、）あんまり上との付
き合いがねえんだべね。だから俺の娘もそう
なんだけども、職場さ今行ってっから結構上
の人たちとも付き合いあんだべけっども、要
するに自分から飛び込んでって、上の人たち
のところは何とか何とかっつうのはないん
だよね。やっぱり出会いの場が限られてんの
さ。そのなかで探すとなっさ、無理だと思
うのね。

R2：なかなかね。

水野（父）：色んな所さ出張っていけばこそ、
多少は出会いの場があるんだかもしねえけ
ども。どうしてもこの年代の子どもたちっ
つうのは同級生との付き合いが多いんだよね。
我々のときは先輩だのなんかも結構付き合
いがあったたしさ。色んなサークル活動も
あっただしね。今そういうのもないしょ
う。だから、やっぱり出会いの場が少ないん
だべね。

一方、専門学校を卒業後に看護師として病院に勤めていた隆史さんは、現在は転職を経て介護施設で看護と介護の仕事に携わっており、前職から給料はある程度減少したものの、「職員同士の関係」が「非常に居心地の良い場所」であることに満足していると語る。

また現在の生活についても「相当、今恵まれている」と感じており、長らく「家の庇護っていうか、両親から色々な援助を受け(ら)れる状況」にあると述べている。しかしながら、この状況が「やっぱり長く続くとは思えない」ために、「その前に何とかしなくちゃいけない」と考えている。そして、このような今とは違う将来像を模索しなければならない現状が、隆史さんに「漠然的な不安」を与えているという。

R1：希望とは、またちょっと違うところで、逆に将来に関して不安っていうか、「どうなんのかな」っていうのとかはあったりしますか？

水野：こんな感じで続けていけねえだろうなと思うんで。このままじゃいけねえなとは思ってますけど。

R1：こんな感じというのは？

水野：相当、今恵まれてる。恵まれてるっていう表現ですけど、とりあえず食べるのには困らない状況にいるんですけど、こういう状況がずっと続くようには思っていないので、さすがに。その前に何とかしなくちゃいけないなとは思ってますけど。

R1：それは具体的には独り暮らしをするとか、そういうことですか？

水野：いや、結局、家に居ると何かあっても家の庇護っていうか、両親から色々な援助を受け(ら)れる状況にあるんで、その状況に今、完全に、何年間もですけど甘えちゃってるわけで。私もそれが、やっぱり長く続くとは思えないんですよ。当然、親も年齢が上がってきますし。なんで、どうしようかなと。何か考えてるところ。考えるっていうか、それはやっぱり漠然的な不安としてあります。

なお上記のような現状認識のもとでも、隆史さんにとって自身の将来の指針を見出すことは難しく、「いつか今より良く変わっていったるようには思いたい」と語っている。

加えて隆史さんは、かつては実家を出ることを考えたものの、現在はそのような希望は「特にはない」と語り、重ねて結婚についても「ここ3年ぐらい」は「多分駄目だろうな」と感じ

られるようになっている。またこのような結婚への意識の背景には、「お金の面」を始めとする様々な面で、誰かが「1人自分の隣に増えると、もうやってけねえかなっていう」思いがあるのだと言及している。

水野：(専門学校卒業後に最初の病院に勤めていて何年ぐらいかな。そのときは若干(結婚したいと)思ってたんですけど。だから今になってはあんまりもう。結婚しても、しょうがねえなあみたいな。いや、良くないですよな。

R1：(結婚)してもしょうがないなとかっていうふうに思われるのは、どういうことですか？何か事情があったり？

水野：事情があったからじゃないですけど。多分、誰か例えば1人自分の隣に増えると、もうやってけねえかなっていう気がします。お金の面でも何でもそうですけど。誰かが隣に伴侶として迎えるっていうか考えられないような感じですね。(そう感じられるようになってきましたよ、なんか。ちょうどそれ、最近ここ3年ぐらいですか。いても面倒も見れねえし、多分駄目だろうなって。

R1：それは、お仕事が忙しいから？

水野：いや、そういうんじゃないんですけど。何なんすかね。よく分かんないですけど。

3.3. 小括——2組の親子が示す不安や葛藤

上述の2組の親子の語りをまとめれば、親は「子育て」が終わったことを一定程度認識するも、親から独立した後の子どもの不安定な社会生活をも同時に想起することから、子どもの「自立」がまだ実現していないことを憂慮している。加えて親は、今後の子どもの生活を成り立たせるための生活リズムの改善や結婚などを期待しているが、本人の就労状況や居住環境などから被る制約により、それらの期待の実現が困難であることも同時に理解している。

一方でその子ども(若者自身)は、家族に支えられた現在の生活に一定程度の安定を感じつつも、その生活が維持できなくなる将来をも同時に予期することから、将来に対する漠然とし

た不安を感じている。しかしながら、現在の生活では自身の結婚や離家なども期待することができず、今後「何とかしなくちゃいけない」という現状認識に対して明確な打開策を見出ずにいる。言い換えれば、これからの生活において将来の不安を解消するための自身の「変化」が求められていることを自覚しながらも、従来型の「自立」のメルクマールの獲得を想起することは難しく、現在の生活を続ける以外の具体的な選択肢も模索し難い状況があると捉えることができる。

4. 見出される「自立」への契機——小林さん親子の語り

前節では、現状を不安視しつつ安定的な将来像や「自立」を想定することが困難となっている親子の実態が把握されたが、本節では、これまで抱えてきた「自立」への不安を払しょくようになった小林さん親子の語りに着目し、本人の不安定な状況にも否定的な見解を加えない「自立」観が示されることを確認したい。

4.1. 「子育ての悩み」の払しょくと、期待の醸成——小林圭子さんの語り

小林圭子さん（小林和弘さんの母親）は、和弘さんが突然の体調不良により中学校に通えなくなってしまう過去があることを語り、彼の体調不良の原因をこれまでずっと把握しきれなかったことが、一番の「子育ての悩み」であったと述べている。

R1：子育てのなかですごく悩まれたこととあって、あたりさわりましたでしょうか？

小林（母）：やっぱり、今言ってた中学校2年ぐらいから、ちょっと体調、すごく崩してしまったので、学校に行けないとか、色々あったものですから。何の原因かって、気持ち悪いのとか、体がだるいのが、どういう原因かってというのが分からなくて。ずっと色んな病院に、色んな所に行ったんですね。そういうことが一番、悩みでしたかね。

また圭子さんは、かつての和弘さんの体調不

良の原因には彼に勉強やサッカーなど「何でも一生懸命させちゃった」ことがかかっていたと考えるために、和弘さんの体調を悪化させたことについて、「そういう負い目がずっと続いて」いたのだという。加えてそのような和弘さんへの「負い目」が、これまで圭子さんの「子育ての悩み」を増幅させていたこともうかがえる。

小林（母）：それまで順調にあって、何でも一生懸命やる子だったので、勉強もじゃあ「一生懸命やれば」って（言って）、サッカーも本当に「一生懸命やれば」って（言って）、やらせ過ぎちゃって、つつい私が、これもこれもって言ったのが原因で。一度熱みたいの出ちゃって調子悪くなったこともあったので、それがずっと続いてたもんですから、自分としてはすごくそれが負い目っていうか。（略）やっぱり、上の子だったもんですから、何でも一生懸命させちゃったんですね、私も。で、そういう負い目がずっと続いてて。それが一番、子育ての悩みでしたね、ずっと。ただその上で圭子さんは、最近になって和弘さんの医療機関にかかる頻度が大きく減少したことや、彼の体調が良好化していることが「救い」であると述べ、「一安心」することができたのだと語る。またこの点において圭子さんは、これまで「長い子育てが続いていた」のだとも言及している。

小林（母）：早く治らないっていうのもあるし、自分がそういうふう原因にして（＝なって）しまって。かわいそうだったなっていうのが、ずっとあったので。で、今はちょっとね、どうにかあんまり、もうお医者さんも、まるっきり切ってはいないんですけど、心療内科のお薬も飲んでないですの、すごくこう、ああって体調悪くてっていうこともなくなったので。それだけでも私は救いというか。

R1：お母さまとしては一安心という。

小林（母）：はい、一安心。長い子育てが続いていたんですね、そういう面では。はい。

重ねて圭子さんは、「今の世の中」では若者

のライフコースに「平均ってというのがなく
な」ったために、それぞれの生き方を「別に私
は比べない」と語る。またこのような理解のも
とで、和弘さんのライフコースを「変則的な何
ともいえない」ものであると表現しつつも、そ
のような生き方を肯定的に捉える認識が示され
ている。

小林（母）：うちはこんなもう、変則的な何と
もいえない、おかしなうちなので。まあ一般
的にはもうね、孫がいても全然おかしくない
（笑）。もうでも、別に私は比べないです。も
う今の世の中でね、比べててもね。あの、平
均ってというのがなくなりましたよね、皆さん
もう色々なので。それでいいなと思って。元
気でやってれば、どうにかかかって。

4.2. 主体的なキャリアや将来像の構築——小 林和弘さんの語り

それでは一方で和弘さんは、現在の生活や将
来の見通しをどのように捉えているのだろうか。
現在、看護師養成の専門学校に通う和弘さん
は、これまで長い間体調が優れず、最初に
通った専門学校も体調不良を理由に中退した過
去があるが、これまでのアルバイト生活や現在
の学校生活のなかで、体調面を考慮した「自分
のなかのリズム」を徐々に掴んでいっているこ
とについて表現している。

R1：学校生活であるとかアルバイト生活とか
で、「ああ、こういうリズムが得意だなあ」
みたいなこと、思われたりしたんですか？

小林：こう何か、多分自分はある程度忙しい所
のほうが好きで、やっぱり何かに夢中になるの
が、自分、体調面もあまり考えずできたと思
うんですよ。で、やっぱり体調が自分が悪
かったときでも、サッカーの試合とかを少し
やらしていただくと、そのことだけに集中で
きて、やっぱり体調が悪いなりにもそれには、
まあ少し短い時間とかでしたけども、考えず
できたので。で、やっぱりその、あまり長い、
何て言うんですか、何も考えないで、ずっと
いる時間とかが自分のなかで苦痛で、何か色
んな、嫌なことであったり、体調のこととか

考えちゃうので。ある程度、こう決められた、
何て言うんですかね、スケジュールじゃな
いっすけど、何か決まったことの方がパッ
パッパッできるの、それも自分のなかの
リズムが良いのかなっていうのもありますね
え。でー、やっぱり病院のとか実習とかをさ
せていただいて、治療がもう安定してる方と
かと接すると、自分、こう何して良いのか分
からなくなったりとかなんで、すごい混乱し
てしまって、どうしようって困って。んでま
あ、自分の勉強不足とかもあるとは思って
すけど、このまま、普通に長い時間、何もし
ないで過ごしてて良いのかなあと思うより
は、やっぱりその、色々、大けがした後の人
とか、色々チューブとかがささってるので
…、チューブ点検とか…。

R2：点滴の針がちゃんと入ってるのかとかね。
小林：とか。そういうものがあるので、そういっ
てすぐ、患者さんのすぐそばとか、行って見
る方が良いのかなあっていうのは思ったの
で。

和弘さんは、「ある程度忙しい」状態や「何
かに夢中にな」れる状態であると「体調面もあ
まり考えずできた」と感じられるようになって
おり、また現在の生活でもそのような「夢中にな
る」時間があることについて言及している。
重ねて、「何も考えない」時間や何かに打ち込
めない時間には「苦痛」を感じてしまうといい、
そのような時間では「色んな、嫌なことであっ
たり、体調のこととか考えちゃう」のだと述べ
る。ゆえに和弘さんは、ある程度定まったスケ
ジュールをこなしていくことが「自分の中のリ
ズムが良いのかな」と実感できるようになって
いる。

またこのような「自分のなかのリズム」が捉
えられてきたことにより、現在の学校生活での
環境の変化にも適応できるようになっていると
述べる。和弘さんは専門学校入学時、「環境の
変化」に伴う体調の悪化に苦しんだというが、
現在では「自分が全部、完璧にやるって思わな
くなくなってきた」ことで周囲との持続的な関係性
を徐々に構築していくことができ、また「休息

のバランス」も折り合いのなかで探すことができていると語る。加えてこのような生活を営んでいくなかで、「ふっと気持ちが楽になった」のだとも言及している。

そして和弘さんは、前節の斉藤さんと水野さんの語りに比較しても自身の将来への見通しを具体的に表現しており、30代での目標について以下のように述べている。

小林：そうですね。まあやっぱり30(歳)になって、ようやく自分がこう、やりたいことというか、少しずつですけど体調も良くなって目標ができてきたので、まあ、これを維持できるように、頑張っていきたいなっていうのはありますね。で、せっかく、こう自分を、こう助けてくれた方がいらっしやるっていう。

R2：例えば？

小林：まあ、やっぱり親であったり。まあ家族、弟も少なからずとも（助けてくれたと）思ってたです。まあ、そういう人に恩返ししていきたいなっていう。

R2：うんうんうん。できますよ。家族は本当ねえ、支えてもらったからねえ。何が恩返しになりますかね。

小林：そうですね。やっぱり、まあ、自分が元気に働いてくところを見せるっていうのが一番良いのかなっていうのは思いますね。まあお金も大事で、生活してくっていうのも大事だと思んですけど、まあずっと、こう見てきてくださってるものですから。まあそれをこう、何ていうんですかね、見せるのが一番良いのかなあと。

和弘さんは、改善されてきた体調を維持できるよう「頑張ってい」くことを今後の目標として示しており、またこれまで体調が不安定な時期に助けてくれた人たちに「恩返ししていきたい」という思いがあるのだと語る。ゆえに和弘さんは、家族を始めとする「助けてくれた」人たちに、「自分が元気に働いてくところを見せるっていうのが一番良いのかな」と述べている。

5.まとめと考察

5.1. 従来型の「自立」への不安と、「認識論的誤謬」

これまでの社会においては、従来の象徴的なライフイベントの達成をもって若者の「自立」を捉えてきた実態があり、社会政策もそのような若者の「自立」を強く期待してきたが、第3節での2組の親子の語りから示されたのは、従来型の移行モデルとは異なる子ども（若者自身）のキャリアが「自立」したものとして見なされず、親と子が安定的な将来像を見通すことが困難となっているという状況であった。また親は、今後の「自立」に向けた子どもの生活リズムの改善や結婚などを期待しつつも、そのような「自立」が子ども（若者自身）の就労状況や居住環境といった社会的要因によって阻害されるものとなっていることも同時に理解していた。重ねてその子ども（若者自身）も、将来への不安を払しょくするための自身の「変化」の必要を自覚しつつも、従来の象徴的な「自立」のメルクマールを獲得することは想起しづらく、また今後の具体的な社会生活の指針も持ちにくい状況にあった。

そしてこれらの結果を踏まえれば、従来型の「自立」を期待する社会認識が当事者の不安や葛藤を増幅させるものとなり、ひいては彼らの主体的なキャリア形成に資するものとなっていない実態を指摘することができる。この点に関してファーロングとカートメル（1997=2009）は、客観的な機会の平等が担保されない状況下での人々の失敗や頓挫を個人的な不足に帰結させるような認識の在り方を「認識論的誤謬」と呼び、個々人の選択の責任のみを強調する認識を批判している。したがってあらゆる若者による主体的な「自立」の実現を志向する際には、その「自立」を期待する今日の社会認識や社会政策のうちに「認識論的誤謬」が生じている可能性を問い直し、それらを今日の当事者にとっての「自立」の実現に資する社会資源へと変換させていくことが求められる。またこのようなアプローチとは、様々な社会変動を経験し続け

る現況においてこそ有効なものであるといえる。

5.2. 若者のキャリアを承認する「自立」観の提示

「認識論的誤謬」に陥ることのない社会認識や社会政策への転換を図るためには、そこで据えられる従来型の「自立」観の更新が求められる。この意味において、象徴的な「自立」のメルクマールの獲得によらず現状に肯定的な解釈を加え、自身や家族の将来像を明示する小林さん親子の「自立」観（第4節）には、従来型の「自立」観の更新に向けての重要な示唆が見出せる。小林圭子さんは、これまで和弘さんの「子育て」に「負い目」を感じ葛藤してきた過去を示す一方で、和弘さんの体調が改善しつつある現状に「子育ての終わり」を認識していた。また和弘さんは、現在の生活のなかで自身の体調面を考慮したリズムを掴んでいると同時に、今後の生活の目標を具体的に表現していた。そしてこれらの語りとは、従来までの象徴的なメルクマールの獲得を通じた「自立」の在り方を相対化させながら、「安心」すること（小林圭子さん）や「何かに夢中になる」こと（小林和弘さん）が可能となる将来への主体的な見通しを持たせるものである。すなわち小林さん親子が呈する「自立」観とは、今日の若者の多様なキャリアに内在する当事者にとっての有意義性を積極的に引き出そうとする視点であると理解される。

以上より本稿では、従来型の「自立」観に内包される「認識論的誤謬」を克服するための社会認識として、今日の若者が歩む多様なキャリアを承認し、個々人の将来へのキャリア形成をそれぞれに動機づける「自立」観を提示したい。今日の日本社会においては、若者が「自分固有の人生（a life of one's own）」を営む必要性が高まっているが（乾 2010）、その当事者による「自立」とはそれぞれの「自分固有の人生」を比較することでなく承認することによって実現する。重ねて既存の社会構造のリスク化が不可逆的に進行するなかでは若者のライフコース

も脱標準化するために（宮本 2005）、自身のライフコースにおける多様な経験を有意義なものとして解釈する創意が一層の重要性を増している。したがって従来までの「自立」のメルクマールの獲得によらず、若者個々人のキャリアの多様性や“固有性”を承認し、生じる様々な経験に対する自らの意味づけや動機づけにもとづく主体的なキャリア形成を肯定する「自立」観にこそ、今日の若者の「自立」を支える社会認識としての可能性を看取できよう。

最後にこのような考察を踏まえれば、既存の社会政策には若者自身の多様な動機づけにもとづく主体的なキャリア形成を支えようとする認識に乏しい現状があるとも捉えられる。今日の若者にとって旧来の社会構造や社会認識を追求することはますます困難なものとなっているが、その状況下においては個人化された「生きがい」が彼らの「自立」や「生活」を豊かに動機づけるものとなっている（小山田 2021）。今日の若者の社会的包摂を目指す社会政策が、自己実現や社会参加を多様に果たす若者の姿をより仔細に把握し、またそのような若者のキャリア形成の過程をそれぞれに支えていくことが求められる。

注

(1) 亮介さんの結婚などに関する認識は、2013年（wave10）の質問紙調査の自由記述回答に具体的に浮かび上がる。亮介さんは、2年目となる「現職（介護士）は残業や過酷な日程もなく満足」だと述べるが、「ただし、結婚、子供を作ろうと思わない事。切りすてる物をハッキリさせておくと、充実して過ごせます」と付言する。またこのような認識から亮介さんは仕事の傍ら、趣味の旅行にも多くの時間を使うなどしてプライベートを充実させている。

付記

本稿はディスカッションペーパーとして公表した内容に大幅な改稿を加えたものである。また本研究は、日本学術振興会（JSPS）科学研究費補助金・特別推進研究（18H05204）、基盤

研究(S) (22223005), 基盤研究(C) (25381122), 基盤研究(B) (16H03778, 21H00767) および厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業(H16 - 政策 - 018) および東京大学社会科学研究所の研究資金, 株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けたものである。東大社研高卒パネル調査データの使用にあたっては, 高卒パネル調査企画委員会の許可を受けた。そして本インタビュー調査にご協力いただきました皆様に, 感謝を申し上げます。

参考文献

樋口明彦, 2004, 「現代社会における社会的排除のメカニズム——積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって」『社会学評論』第55巻第1号, pp.2-18.

Furlong, Andy and Cartmel, Fred, 1997, *Young People and Social Change second edition*, Open University Press. (= 2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸山妙子訳『若者と社会変容——リスク社会を生きる』大月書店)。

Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press (= 2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社)。

濱口桂一郎, 2013, 『若者と労働——「入社」の仕組みから解きほぐす』中央公論新社。

広田照幸, 1999, 『日本人のしつけは衰退したか』講談社。

本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房。

———, 2014, 『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波書店。

乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店。

石田賢示, 2014, 「学校から職業への移行における「制度的連結」効果の再検討——初職離職リスクに関する趨勢分析」『教育社会学研究』第94集, pp.325-344.

神原文子・高田洋子編, 2000, 『教育期の子育て

と親子関係——親と子の関わりを新たな観点から実証する』ミネルヴァ書房。

加藤彰彦, 2011, 「未婚化を推し進めてきた2つの力——経済成長の低下と個人主義のイデオロギー」『人口問題研究』第67巻第2号, pp.3-39.

喜多加実代, 2011, 「子どもの「主体的進路選択」と親のかかわり」石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子編『格差社会を生きる家族——教育意識と地域・ジェンダー』有信堂高文社, pp.147-168.

児美川孝一郎, 2010, 「「若者自立・挑戦プラン」以降の若者支援策の動向と課題——キャリア教育政策を中心に」『労働研究雑誌』No.602, pp.17-26.

益田仁, 2012, 「若年非正規雇用労働者と希望」『社会学評論』第63巻第1号, pp.87-105.

松岡亮二, 2019, 『教育格差——階層・地域・学歴』筑摩書房。

宮本みち子, 2005, 「先進国における成人期への移行の実態——イギリスの例から」『教育社会学研究』第76集, pp.25-39.

———, 2012, 「成人期への移行モデルの転換と若者政策」『人口問題研究』第68巻第1号, pp.32-53.

———, 2018, 「若者の自立に向けて家族を問い直す」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち』旬報社, pp.57-82.

小山田建太, 2021, 「今日の若者にとっての「自立」に関する考察——若者の「生きがい」に焦点化して」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』No.130, pp.1-11.

武川正吾, 2013, 「家族戦略? ——個人戦略と公共政策の狭間で」『家族社会学研究』第25巻第1号, pp.43-51.

天童睦子編, 2016, 『育児言説の社会学——家族・ジェンダー・再生産』世界思想社。

粒来香, 1997, 「高卒無業者層の研究」『教育社会学研究』第61集, pp.185-209.

山口毅, 2020, 「生存保障への教育社会学的アプローチの失敗——逸脱の政治パースペクティブによる規範的考察」『教育社会学研究』第106集,

pp.99-120.

山口泰史・伊藤秀樹, 2017, 「分化するフリーター像——共感されない非正規雇用の若者たち」佐藤香編『格差の連鎖と若者 第3巻 ライフデザインと希望』勁草書房, pp.133-156.

Perspective on “Independence” Recognizing Young People’s Career Development: Focus on the Perceptions of Parents and Children

Kenta OYAMADA

This paper uses interview survey data on parents and children to clarify their perspectives on “independence” based on their and social conditions. As a result of these surveys, this paper aims to present the perspective on “independence” that can recognize diverse current situations in respective young people, and contribute to their career development by themselves.

Based on the survey results, this paper points out two main findings as follows. First, there is an underlying “epistemological fallacy” in social cognition that expects “independence” of today’s young people through acquiring traditional and symbolic *merkmal*. Therefore, when aiming for the realization of respective “independence” of young people, the possibility that an underlying “epistemological fallacy” occurs in today’s social perceptions and social policies that expect “independence” of young people must be re-questioned, and these perceptions and policies must be converted into social resources that contribute to the realization of “independence” in today’s society.

Second, as a social perception to overcome the underlying “epistemological fallacy”, this paper presents the perspective of “independence” that can recognize the diverse career paths of today’s young people, and motivate each in their career development for the future. In other words, the perspective on “independence” that recognizes the diversity and uniqueness of the careers of young people, and affirms each subjective career development based on their own meaning and motivation for the various experiences that occur in their lives, instead of acquiring symbolic *merkmal*. Therefore, we should find potential in the perspective as a social perception to support the “independence” of young people.

Keywords: Independence, Young people, Career